

こうじ
工事の
げんば
現場より

亭榭保存修理事業

今はこんな様子だよ。

6月1週目



ひわだぶき やね ふきかえ
檜皮葺屋根の葺替にあたり、まずは屋根の頂きにある瓦棟の解体を行いました。取外した瓦は1枚ずつ調査し、破損や劣化等の具合により再利用できるものとできないものに分別しました。再利用出来ない瓦は、補足分を新しく作る必要があるため、その形状や数量を調査していきます。また、この工事では積み方が変わってしまっている瓦棟を戦前の古写真に基づき復原する計画であるため、解体しながら古い屋根の痕跡を探り、過去の仕様を推定し、今後の工事に役立てます。解体作業中に行う調査は、後世の技術者にとっても有益な情報として残していきます。



▲棟瓦の積み方を確認するため、断面構造が分かるように解体しました。



▲中央の瓦の裏側に、昭和33(1958)年に作成した時の記録が記されています。同じ刻印を持つ瓦が複数あり、同時期に新調されたと考えられます。

奈良市奈良
鈴木工業KK
作 赤井口文
昭和三十三年四月修補
屋根葺 杉岡繁治
(他二人) 衣川 森口



西面の鬼瓦

上面に溝がある
(他の3つにはない)



西面(古い?)

南面

東面(社名刻印あり)

北面

▲鬼瓦4つのうち、西面のものだけ古い見た目をしていて仕様がわずかながら異なります。残り3つのうち1つに昭和33年の刻印がある瓦と同じ社名刻印があるので、西面のものは戦前(原三溪時代)のものである可能性があります(残念ながら証拠は発見できませんでした)。仕様の差異は遠目からでは気づかないほどわずかで、例えば経の巻(鬼瓦の頂部にある3つの円筒形の装飾部分)の巴紋の形状は、古いと目されているもののほうがふくよかな形をしています。

職人file 02【瓦葺士】



ユネスコの無形文化遺産に登録されている「伝統建築工匠でんとうけんちくこうしやうの技わざ：木造建造物を受け継ぐための伝統技術」の一つである「屋根瓦葺やねかわらぶき」を担うのは、瓦をつくる職人、その瓦を葺く職人など、分業制で成り立っています。現場で実際に屋根を葺く瓦葺職人は、解体においては古い瓦の取り外し・清掃、再利用の可否の調査、施工にあたっては古い瓦と新しい瓦をうまく調整しながら納めていく作業を行います。再利用の可否を判断するのは瓦を叩いた音の違いから。なるべく古いものを残しつつ、建物全体を風雨から守る屋根としての品質を保持するため、厳密なチェックを行います。